

預かり保育の「ニーズ」はいかに語られるか
都内幼稚園の保育者へのインタビュー調査の分析から

清水 美 紀*

Need Interpretation over Extra Hours for Childcare in Kindergartens:
Analysis of Interviews with Teachers in Tokyo

SHIMIZU Miki

Abstract

The purpose of this study was to investigate teachers' need interpretation over "extra hours for childcare in kindergartens". The data was based on semi-structured narrative interviews in 2013 with ten teachers working at kindergartens in Tokyo which provide extra hours for childcare. In particular, the study analyzed the discourse about needs from a perspective by Fraser (1989), for she drew social structural shifts and political culture by focusing on need interpretation and analyzing contests among rival discourse about needs.

The results indicated there were both positive and negative discourses about needs for childcare. Teachers realized and accepted that parents have difficulty raising their children and need childcare support. On the other hand, several teachers had a somewhat negative view of parents, mentioned the importance of education at home and emphasized needs of children, though they admitted the necessity for extra hours for childcare. In either case, teachers interpreted that the extra hours for childcare were needed for children, rather than for parents.

In summary, these findings suggested that discourses about children effected on the need interpretation over extra hours for childcare.

Keywords : extra hours for childcare, needs, kindergartens, teachers, Fraser

1. 問題の所在

1990年代後半以降、子育てを「私的なこと」としてではなく、「公的なこと」として扱おうとする言説が社会全体で強調されるようになった（横山 2004, p.79）。こうした流れのなか、預かり保育⁽¹⁾はひとつの政策課題⁽²⁾となり、多くの幼稚園で「教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動」（文部科学省 2008）として実施されていった。すなわち、これにより保育所のみならず幼稚園もまた、長時間保育への要請の受け皿としてその一端を担うようになった。以来、預かり保育をめぐるのは、その実態や実施上の課題、有効性等が多くの調査、研究⁽³⁾によって検討されてきた（無藤 2007, 園田・無藤 2001等）。

このように預かり保育は、公共的に対応すべき課題とされてきたが、子育てに関するすべての困りごとがニーズとして扱われ、政策課題となっているわけではない。ニーズとして捉えられないような多くの困りごとが存在している（相馬 2013）。すなわち、「何らかの基準に基づいて把握された状態が、社会的に改善・解決を必要とすると

キーワード：預かり保育、ニーズ、幼稚園、保育者、フレイザー

*平成25年度生 人間発達科学専攻

社会的に認められた場合に、その状態をニード（要援護状態）とすることができる」（秋元ら編 2003, p.356）のである。この議論をふまえると「ニーズ」は、社会的な文脈に沿って構築され、政策課題になることを決定づけるという点で、きわめてポリティカルなものといえる。だからこそ、何が「問題」、「政策課題」とされるのか、されないのか、その論理は何かという、「ニーズ解釈」（Fraser 1989）を注視していくことが重要となる（相馬 2013, p.44）。

では、何がニーズとして語られ、どのような論理を通して、預かり保育は公共の対応すべき問題として扱われてきたのだろうか。預かり保育の政策的展開を通時的に追っていくと、その意味付けには変化があったことが指摘されている（石黒 2010, 清水 2016）。この通時的变化を「ニーズ解釈」という視点から追うと、当初、預かり保育の実施を支える論理は、「女性の社会進出への対応」であったが、2000年ごろから「子どもを産み育てることへの負担感や不安」など、少子化の要因に対応するという解釈が登場し、その後には「幼児の生活の連続性の観点から」の「家庭の教育力の補完」として意味づけられていったという（清水 2016, p.114）。そして、預かり保育は政策課題として扱われながらも、その背後では、子育てをめぐる家庭の責任を強調する論理もまた、働きつづけていたという点も指摘されてきた（同上）。

ただし、上記の先行研究では、預かり保育の政策形成に関わる言説にのみ焦点が当てられている。レンツ（2013 p.278）によれば、「これから先、未来の公と私の関係はまだ不確定であり、現在のところ、多くのミクロ次元の政治過程に翻弄されて、ジグザグな方向性を示している」という。ここに示唆されているのは、「ミクロ次元の政治過程」、すなわち実践のレベルにおいて、何がニーズとして扱われ、それがどのような論理によって説明されるのか、公と私の関係がどのように捉えられているのかということに言及していくことの重要性であるだろう。そして、政策レベルでの「ニーズ解釈」が、実践レベルにおいても反映されているのか、あるいは反映されていないのかという点も併せて見ていかなければならない⁽⁴⁾。

とくに保育者は、預かり保育の政策レベルでの「ニーズ解釈」や政策動向を引き取り、それを実践レベルで支えていると考えられる。保育者自身は、預かり保育のニーズをどのように捉え、どのような論理からそれを説明するのだろうか。

以上を受けて本稿では、保育者による預かり保育をめぐる「ニーズ解釈」を明らかにする。そしてこの検討を通して、「私的なこと」として主に個人、家庭の問題として語られてきた子育てが、どのような過程を踏み、「公的なこと」へと再編されてきたのか、あるいは現在、再編されようとしているのかという点、すなわち子育ての公私の再編をめぐる課題を探っていくことへとつなげていきたい。

2. 研究の方法

本稿では、2013年7月～8月におこなった東京都内幼稚園に勤務する保育者10名（A～J。以下、調査協力者をアルファベットで記すこととする）への半構造化インタビューのデータを検討する。本稿にてインタビュー調査を用いたのは、対象者となる人びとが「自分のまわりの世界をどう解釈しているか」（Merrriam 訳書 2004, p.105）ということに接近するためである。

調査協力者の選定にあたっては、①2012年に筆者が実施した質問紙調査の協力者への依頼⁽⁵⁾と、②2経路でのスノーボール・サンプリングを併用した。調査協力者の概要は、表1に示した通りである。なお、調査協力者の職位や保育歴に関する属性は、調査当時のものである。

調査当時、調査協力者の勤務する幼稚園では、いずれも預かり保育が実施されていた。ただしこのような状況は異例的ということではない。調査当時にごく近い2012年度には、預かり保育を実施する幼稚園は、全国で81.4%であった（文部科学省 2013）。とくに私立幼稚園にいたっては、その実施率は94.2%におよんでいた（同上 2013）。これをふまえると、本調査では預かり保育の実施がじゅうぶんに拡大した段階における、保育者の語りが出されていると考えられる。この点にも留意しながら分析をすすめていく。

そしてインタビューにあたっては、半構造化インタビューの形式を取りながら、預かり保育の実施による気づきや課題、利用者である親についてたずねた。インタビューは調査者の大学構内の研究室または調査協力者の勤務先近くの喫茶店で行い、所要時間は1時間～3時間半であった。また調査協力者からの承諾を得た上で、インタビュー内容は、ICレコーダーに録音した。そしてインタビュー終了後に、すべての事例につき録音データを

表1 調査協力者の概要

	園種	性別	職位	保育歴
A	公立	女性	園長	32年
B	私立	女性	主任	34年
C	私立	女性	園長	約30年
D	私立	女性	主任	15年
E	私立	女性	担任	14年
F	私立	女性	担任補助	19年
G	私立	男性	担任	4年
H	私立	女性	担任補助	7年
I	私立	女性	担任	8年
J	私立	女性	教頭	23年

文書化し、インタビューデータを作成した。

なお、本稿で扱うインタビュー調査は、お茶の水女子大学人文社会科学研究の倫理審査委員会の審査を経て承認を得ており（2013年7月）、調査の手続きおよび内容は適切に設計されている。

3. 分析の視点

以下では、上記の調査によって得られたインタビューデータから、預かり保育をめぐるニーズがいかに関与しているかという点を見ていく。そしてこれを分析する視点として、本稿ではFraser(1989)による「ニーズ解釈の政治」という議論を敷衍する。

フレイザーによれば、ニーズとは自然な与件ではなく解釈的なものであるという。「何らかの望ましい状態の判断、何かが欠けている状態にあるという判断は必然的に定まるものではなく、他者への批判や応答の結果定まって行く」（荻野 2008, p.38）ものなのである。そしてフレイザーは、具体的にニーズのことを下記のように捉える。「より重要なことには、（これまでのニーズ議論は）問題におけるニーズの定義を当然のことと扱うのである。まるで、自明的で、論議を必要としないものかのように。そのため、人々のニーズという解釈はそれ自体で政治的な要素であるという事実を伏せてしまう。実際には、まさに政治的な要素であるにもかかわらず」（Fraser 1989, p.144）。すなわち、「ニーズ解釈」は「政治的な要素」として、「公的なものと私的なものとの間の境界線」の移動（杉田 2015, p.3）、あるいは再編といったことに深く関わっているのである。

そこで、本稿においても上記の問題意識を共有し、「ニーズ解釈」への注目を通して、解釈する主体がどのようなことを「問題」として議論しようとしているのかということに接近してみたい。とくに本稿では、ニーズが「必然的に定まるものではなく、他者への批判や応答の結果定まっていく」（荻野 2008, p.38）という読解をふまえ、保育者がどのような解釈を通して、預かり保育のニーズを肯定しているのか、あるいはニーズを批判しているのかという点を中心に整理し、これを分析していくこととする。

加えてフレイザー自身の関心に沿って、「ニーズが誰のニーズとして語られるか」というところにも注目してみたい。例えばフレイザーは、アメリカのチャイルドケアについて、「働く親のニーズというよりもむしろ、フルタイムケアに対する子どものニーズ」と解釈されることを通して、施設保育ではなく養育手当を充実させるという方向性が取られてきたのではないかという点に言及する⁽⁶⁾（Fraser 1989, p.169）。もっとも預かり保育においても、その場に関わりうるのはそれを利用する親だけではない。子どももまた預かり保育の場に深く関わり過ぎている。この点をふまえると、親のニーズとして語られることだけでなく、子どものニーズが語られる可能性も考えられる。親のニーズという解釈、子どものニーズという解釈が、保育者のニーズへの意味づけにどのように関わっているのだろうか。この点も分析の課題に加えたい。

以上を分析の視点としながら、預かり保育のニーズが保育者にどのように解釈されているのかという点を考察していく。

4. 預かり保育をめぐるニーズの解釈の諸相

4.1 ニーズを肯定する言説とその解釈

今回の調査では勤務する幼稚園において、預かり保育を利用する上での「条件」があると語る保育者はいなかった。ただし、たとえばAの園では、長期休業期間中に関して、原則として就労を理由とした利用に限定するという了解を、保育者と親の間で共有しているということはあった。そのほか、Fが「(預かり保育を利用する)理由が明確に見えていない場合にはうかがう時はあります」と答えたように、「条件」を設定しない場合でも、利用に際しては、親とのあいだで何らかの形で意識共有を図っていることが推察された。このような保育者と親の間でのやり取りは、下記の語りにもうかがえる。

調査者：ちょっとこうお互いに意思疎通をしあいながら、(預かり保育を)やっている感じ…(ですか)？

B：そうですね。それ(意思疎通ができてい)なら、こちらも納得っていうか、いいですよって。ご事情のある方のみって言ってるので。そのご事情のね、範囲を決めてないってことですね。それは、保護者の方に任せてる。

1) 親のニーズという解釈

このように、預かり保育の利用の背景には何らかの「事情」、すなわち親のニーズがあるものと考えられる。保育者は、預かり保育を利用する親たちのニーズをどのように理解し、解釈しているのだろうか。

B：お仕事をしていない人も、仕事で預かりを(利用)しようとしている人もものすごくたくさんいますけど、あの、お母さんがちょっと買い物に行きたいとか銀行に行きたいとか、あの…病院に行きたいとか、お友達とお茶したいとか、もうなんでもいいんです。

H：基本的にはやっぱりお仕事の方。ほんとにフルタイムで働かれてる方もいるし、あとはまあパートの方もいるし。(中略) なかなかこう家の周りで遊ばせられないとか、あと、友達が近くにいないとか、場所がないっていうので。(中略) あとは上の子がいて、習い事とか学校のこととかあつたりすると、その曜日だけ入れてるとか。あとは幼稚園に慣れさせるために、仲の良いお友達も入ってるので一緒に入れるとか。まあうちじゃもう、見きれないっていうか、わんぱくすぎて、毎日公園に連れてくわけにもいかないし、みたいな感じで。

上記のように、預かり保育を利用する背景が多岐にわたっているということを、多くの保育者が語った(B、E、F、H、J)。B、Hの両者は、利用理由を「とくには聞いてない」(B)という。そのうえで、親の就労以外に親自身の用事、子どものきょうだいの用事や、子どもの遊び場としても預かり保育が利用されていることに触れながら、それらを「引き受ける」(B)という姿勢でいることを語った。

そして、このように保育者が種々の家庭の事情を汲みつつ、預かり保育の利用を受け止めている背景には、各家庭における子育ての困難さへの理解があると考えられた。

A：でもなかなかおじいちゃんおばあちゃんが一緒に住んでる家庭も少ないので、すぐお母さんたちも頑張ってると思います。(中略) 私なんかは主人の両親が同じ敷地内に住んでる中で、子育て、小さいときはしてきたので。ちょっとお願いします、出かけるときにはお願いしますとか。(中略) あとなんかこっちは(子どもを)叱ったときに、いつのまにかおじいちゃんおばあちゃんのところに行ったりとか。なんか逃げ場？(中略) そういう場って今ないので。親も苦しいし、子どもも苦しいだろうなと思うんです。

ここではA自身が、「主人の両親が同じ敷地内に住んでいる中」での子育てだったことを振り返り、現在の子どもと親たちの置かれた状況に触れている。そして、祖父母や親族から手助けをもらえないなかでの子育てを、

「苦しい」であろうと思いやっている。そのうえで、親、子ども双方にとっての預かり保育の必要性を意味づけている。さらに下記Hは、子どもが「おうちにだけずっといたら（私なら）おかしくなっちゃう」と親の置かれた状況に自身を重ねながら、親の就労状況に限らず「預けられるような場所」があることを肯定的に受け止めている。

H：あと園長なんかも、あのもう少しそうやってちょっと、行き詰ってるお母さんなんかは、ちょっと預ければいいのにね、なんて言ったりするので、ほんとに働いてる人だけのものではなくて、子どもにいっぱい遊ばせてあげたいって上（＝Hの勤務する幼稚園園長）も思ってるので、すごくそういう意味では、安心して、状況っていうか、内容は関係なく預けられるような場所になってるんじゃないかなって思います。

ここで注目されることは、「園長」との会話を紹介するなかで、まだ預かり保育を利用していない「行き詰っているお母さん」のいわば表面化されていないニーズにも言及し、預かり保育を活用してほしいと語っている点にある。つまり、預かり保育へのニーズを肯定的に捉え、それに応答しているだけではなく、新しいニーズを引き出すことにも保育者はかかわっているということ、あるいはかかわりうるということが示唆される。

2) 子どものニーズという解釈

このようにそれぞれの幼稚園において、預かり保育の実施がいわば定着しているような状況のなかで、預かり保育をめぐるニーズを受容するという姿勢は保育者に共有されているようにみえる。ただし、こうしたニーズへの応答は、保育者それぞれのなかでの批判や葛藤の過程を経て、得られた解釈であると考えられた。

H：そうそう、正直初めは、働いてないんだったら…一応、そんなもうちょっと若いときですけど、子どもとゆっくり過ごしたらいいのに、この時期ってほんと短いって思っていたところが（あって）。やっぱり、それに向いてる人と向いてない人がいたりとか。あとはそういう環境にない人も結構いたりとか。やっぱりその核家族で、子どもと年中いるっていうのは、実際けっこう難しいっていうことなんかも見聞きして、知っていくと、子どもにとっても、友達と思いきり遊べる環境があるっていうのは必要だし、そういう環境にいられることも幸せなんだなっていうふうに今は思うように少し変わってきたかなって思いますね。

ひとつ前の語りにおいて、新しいニーズを引き出すことを積極的に語ったHも、「初め」は預かり保育に対する抵抗感があったという。そしてそのような抵抗感は、親たちが置かれている子育ての状況を見聞きして、知っていく過程で、「少し変わってきた」。ここで、預かり保育への認識に変容をもたらしたのは、親のニーズとしてだけではなく、「子どもにとっても」、「必要」、「幸せなんだ」という解釈だった。すなわちこれ以降、「子どもにとって」のニーズという解釈が、保育者がニーズに応答することを支えてきたものと考えられる。

4.2 ニーズを批判する言説とその解釈

1) 親のニーズという解釈

とはいえ、すべての保育者が預かり保育のニーズに対する抵抗感を解消させているわけではない。たとえばこれは、子どもの「入園を機に」（H）就労を開始する親の存在とともに語られた。

J：親御さんにとつたらば、幼稚園に行ってる間はその…正しいかどうかは分からないですけど、（子育てから）少し解放されたりするんですね。あの子どものことを決してなんだろう、邪魔にしているわけではまったくないんですね。まったくないんですけども、でもやっぱり自分を取り戻す時間って、やっぱり親御さんに必要で。（中略）…で、増えてきてるなと思うのが、そういう親御さんがあのやっぱり仕事を持ちたがるっていうか、あのなんだろう…持ちたがるっていうのとはちょっと違うのかな…元々ご活躍の方なんだとは思いますが、あんなうん、仕事を持たれる方が増えてきてる。

このようにJは、親が子育てから離れて、「自分を取り戻す時間」を確保することを重視している。しかしな

がら同時に、園側が預かり保育を実施しているために、親が「仕事を持ちたがる」という側面があるのではないかということを控えめに語る。ここではJ自身、「持ちたがる」という表現を慎重に扱おうとしているが、就労を理由に預かり保育を利用するのではなく、預かり保育を利用するために就労を開始するといった逆説性があるのではないかということを語ろうとしている。前項でみたように、預かり保育を利用する上での「条件」はとくになく、あらゆる利用理由が保育者にも受容されていた。もちろんそこでは、親の就労を理由とした、預かり保育の利用にも了解が得られていた。しかしながら上記Jの語りをみるに、預かり保育をめぐるニーズには、肯定しうるものとそうでないものを分かち、より細かな判断基準があるものと考えられる。

2) 子どものニーズという解釈

このように、預かり保育は実施されていようとも、それが必ずしも肯定的に受け止められているとは限らないのである。Cは次のように預かり保育を意味づける。

C：預かり保育に関しては、私の胸のなかではもうほんとに行政的な感じ。場の提供。場の提供っていう割り切り方ですね。細かく外遊びまで一緒にやったり、いろいろ子どもの育ちのためについていうのではなく、もう場の提供って割り切った感じですね。

Cは預かり保育のことを、「場の提供」と繰り返し表現する。そして、「行政的な感じ」と語るように、政策レベルでの預かり保育の実施は避けられない状況になっているために、「割り切って」実施していることを強調する。この場合、預かり保育をめぐるニーズに対応していないわけでもなく、ニーズを直接的に批判しているわけでもない。しかし、ここでの「割り切る」という語りからは、C自身が、預かり保育の実施、預かり保育のニーズに対応することを、積極的には受容していないことが読み取れる。そして、「子どもの育ちのため」という捉えではないことを率直に語る。同時にこの語りからは、「子どもの育ちのため」には、「場の提供」としての預かり保育ではなく、より適切な「場」が必要であるという、Cの認識もうかがえる。ここでCが語ろうとしていた「子どもの育ちのため」の「場」が何であるかということについては、ほかの語りによって説明されていた。

I：子どもはほんと早く帰りたいんですね。(中略) あの一、半分くらい(他の子どもたち)はもう早く帰ります。11時半(＝降園時刻が早い日)なら11時半。2時(＝通常の降園時刻)なら2時。

このように語るIは同時に、「やっぱりお預かりします、お預かりしますって全部こう(親のニーズを)受け止めていくのが、やっぱりそちら(預かり保育を担当する側)の…なんていうんでしょうね、あの本分と言いますか、役割なので。」とも語り、預かり保育へのニーズを受け止め、実施することを保育者の「役割」と捉えてもいる。しかし、「子どもはほんと早く帰りたい」という、子ども自身の意思として、具体的な降園時刻を示し、「帰る」場としての家庭に言及する。ここでは、親のニーズではなく、子どものニーズという解釈が浮上する。すなわち、子どものニーズという視点から、家庭で過ごす重要性に言及し、預かり保育に応答することへの葛藤が語られているのである。

4.3 ニーズを肯定する言説と批判する言説間の不断な往来

上記まででは、どのような解釈を通して、預かり保育のニーズを肯定しているのか、あるいは批判しているのかという点から語りを整理してきた。しかしながら、預かり保育のニーズをめぐる、ニーズをそのまま受容するわけでもなく、かといってニーズを批判するわけでもない、すなわち両言説間を不断に行き来するような語りも多く見受けられた。

A：だからあの、ほんとにもっと早くお迎えにきてとか、子どもたちにもっともっとこんなふうに手をかけてもらえればとかいろいろ思うけれども、とてもそんなこと言えない。いっぱいいっぱいやってるだろうなって思う家庭も、やっぱり年々増えてきてるなって思うので。

Aは、「ほんとは」子どもたちに対して、預かり保育ではなく家庭のなかで過ごしてほしいという思いをもちつつも、親には「そんなこと言えない」状況であるということも、理解し、受け止めている。このように預かり保育をめぐるニーズについて、「ほんとは」思うところがあるとし、それを語るうえでは、家庭の責任や役割が示唆されている。とはいえAは、預かり保育をめぐるニーズを引き受けることを自身の「役割」であるとも述べ、その必要性も受容している。

F：なんか協力してあげちゃったけど、ほんとによかったのかなーみたいな。たぶん、預けていっぱい働きたい方に対してはすごく良い協力をしてあげてるんだと思うんですけど、それがもちろん悪いことだとはもちろん思わないんですけど。

H：…ま、でも、すごく揺れます。(預かり保育が) あればあれで、ま、ちょっと預けちゃえていうのは、どうかなって思ってみたり。だけど、そこですごくイライラしちゃって、その子どもをもう面倒見ることができなくなる関係になっちゃうんだったら、もうそこはすっぱりこう預けることでお互いにとっていいのかなーとか。すごく。

上記FやHにみるように保育者は、預かり保育をめぐるニーズをどのように受け止めたらいいいのか、その「揺れ」や迷いを抱えてもいる。Fは、「協力」したこと、すなわち預かり保育へのニーズに保育者として対応していることを、「悪いこと」とは思わないとしながらも、「ほんとによかったのかなー」と語る。そして、ここでの「良い協力」は、「預けていっぱい働きたい方」、親のニーズに向けられたものである。つまりここに示されていることは、親ではない側、すなわち子どもにとってそれが「良い協力」なのかどうなのか、というFの迷いであることがわかる。同様にHは、「ちょっと預けちゃえ」という状況を、一方では「どうかな」と批判し、他方では「いいのかなー」と肯定している側面もある。

これらの語りからは、ニーズをめぐる批判や応答は他者間においてだけではなく、個人の認識レベルにおいても展開されていることがうかがえる。

5. 結語

本稿では、何が「問題」、「政策課題」とされるのか、されないのか、その論理は何かという、「ニーズ解釈」(Fraser 1989)に言及していくことの重要性について確認した。そのうえで、1990年代後半以降、公共的な課題として扱われてきた預かり保育に焦点をあて、保育者がそのニーズをどのように捉え、どのような論理からそれを説明するのかという、「ニーズ解釈」を明らかにしてきた。そして具体的な分析に際しては、保育者がどのような解釈を通して、預かり保育のニーズを肯定しているのか、あるいはニーズを批判しているのかという点を中心に整理していった。

保育者は、親の置かれている子育てをめぐる状況を敏感に捉えていた。それは政策レベルでの預かり保育をめぐる「ニーズ解釈」にも沿うようなものだった。すなわち、親の就労状況や、祖父母、親族等に子育てを助けてもらえない状況等への理解が、預かり保育のニーズを公共的に対応すべき課題と解釈し、それに応答することを支えていた。しかし他方では、預かり保育の必要性に留保しつつも、抵抗感や葛藤を抱えていることも吐露されていた。そこでは、家庭で過ごすことの重要性や、どこまで預かり保育へのニーズを受け止めていくべきかという迷いが語られていた。

上記の結果は、預かり保育、ひいては子育てをめぐる責任関係の再編は、「私」から「公」へと一方向的に進められているというわけではないことを示唆しているに他ならない。子育てをめぐる責任関係の境界線は常に移動し、実践レベルにおいても批判や応答の過程を繰り返しつつ、いまだ断定できないものとして存在していると考えられた。

そして上記の知見において、より注目されるべきことは、預かり保育のニーズに応答するうえでも、預かり保育のニーズを批判するうえでも、「子どものニーズ」という解釈が効力をもっていたという点である。一方では、

親だけでなく「子どもにとって」預かり保育は必要であるという解釈が、保育者がニーズを肯定し、ニーズに回答することを支えていた。しかし他方では、「子どもの育ち」という解釈のもとに、預かり保育への抵抗感が語られていたのである。このように2つの相反する論理を支える上で「子どものニーズ」という解釈は登場していた。本稿の目的からはやや離れるが、ここに示されたような、預かり保育を利用する親のニーズとは必ずしも合致しえない子どものニーズがあるとするならば、そうした子どものニーズにどのように応答するのか、あるいは応答することができるのかという点を検討することは、われわれが引き受けるべき重要な課題となるだろう。

そして、本稿では保育者の語りにのみ焦点を当ててきたが、実践レベルでの預かり保育をめぐる「ニーズ解釈」は、とくに保育者と親との相互作用の中で生じ、絶えず修正されているものと考えられる⁽⁷⁾。親自身は、預かり保育へのニーズをどのように語るのか、子育てをめぐる役割をどのように語るのか。また、保育者による「ニーズ解釈」との関連はどのようになっているのか。これらを併せて検討していくことを今後の課題としたい。

【註】

- (1) 2015年度からの子ども・子育て支援新制度においては、預かり保育は「一時預かり」に名称変更したが、本稿では幼稚園教育要領、学校教育法での位置づけに基づいて、「預かり保育」の名称を用いることとする。
- (2) 預かり保育は1997年には「預かり保育推進事業」として、とくに私立園を中心に実施が進められてきた（無藤 2007）。
- (3) 預かり保育の実施上の課題や有効性等に関する先行研究の概要については、たとえば清水（2016, p.100）に整理されている。
- (4) 齋藤（2000, p.15）は、「対抗的な公共圏において形成され、そこから提起される言説が、支配的な公共圏をはじめとする他の公共圏の言説にどのように影響を与えるかは一義的にはいえない」としながらも、「対抗的な公共圏」における言説がもつ政治的な効果、ニーズ解釈をめぐる抗争への影響に言及する。
- (5) 質問紙の最終頁に、インタビュー調査への協力の可否をたずねる項目と、「可」の場合にメールアドレスまたは電話番号を記載する欄をもうけた。今回の調査では連絡先の記載があったすべての回答者を対象に、再度調査の依頼を行った。なお、筆者による質問紙調査では、東京都内53園の教職員を対象に、預かり保育に関する実施状況と意識について検討した。当該調査の結果の一部は、清水（2014）にまとめられている。
- (6) このフレイザーの言及については、清水（2016, pp.101-102）で詳しく論じている。
- (7) たとえば久富（2012）は、教師・親との応答・責任関係構成の特徴は、個々の学校、教師という側に対して、親がどのような距離関係に立ったかということが影響する、と指摘する。これをふまえれば、子育てをめぐる公私の再編について論じる上でも、個々の幼稚園、保育者に対して、親がどのような距離関係に立っているかということも併せてみていく必要があると考えられる。

【参考文献】

- 秋元美世・大島巖・芝野松次郎・藤村正之・森本佳樹・山縣文治編, 2003,『現代社会福祉辞典』有斐閣。
- 安藤智子・荒牧美佐子・岩藤裕美・丹羽さかの・砂上史子・堀越紀香, 2008,「幼稚園児の母親の育児感情と抑うつ—子育て支援利用との関係—」『保育学研究』第46巻2号, pp.99-108。
- Fraser, Nancy, 1989, *Unruly Practices: Power, Discourse and Gender in Contemporary Social Theory*, the University of Minnesota Press.
- 石黒万里子, 2010,「幼稚園における『子育て支援』の課題—『預かり保育』の利用者に着目して—」『家庭教育研究所紀要』第32巻, pp.14-32。
- 久富善之, 2012,「学校・教師と親の〈教育と責任〉をめぐる関係構成」『教育社会学研究』第90集, pp.43-64。
- レント・イルゼ（古谷郁都・左海陽子 訳）, 2013,「フェミニズムにおける『私』と『公』のダイナミクス—ドイツと日本」落合恵美子編『親密圏と公共圏の再編成—アジア近代からの問い』京都大学学術出版会, pp.277-296。
- Merriam, Sharan B., 1998, *Qualitative Research and Case Study Applications in Education*, John Wiley & Sons, Inc., (=2004, 堀薫夫・久保真人・成島美弥訳,『質的調査法入門—教育における調査法とケース・スタディー』, ミネルヴァ書房)。
- 文部科学省, 2008,『幼稚園教育要領』（平成20年3月28日改訂）。
- , 2013,『平成24年度幼児教育実態調査』。
- 無藤隆（研究代表）, 2007,「乳幼児および学童における子育て支援の実態と有効性に関する研究」（科研費 基盤（B））研究成果報告書。
- 萩野亮吾, 2008,「社会活動の公共性に関する考察—『関係論アプローチ』の観点から—」東京大学大学院教育学研究科生涯教育計画講座社会教育学研究室紀要編集委員会『東京大学生涯学習・社会教育学研究』第33号, pp.35-44。
- 斎藤純一, 2000,『公共性』岩波書店。

- 清水美紀 2014「預かり保育に関する保育者の意識—関与状況と実施状況の違いに着目して—」『お茶の水女子大学人間文化創成科学論叢』第17巻, pp.143-151.
- 2016「預かり保育をめぐる『ニーズ解釈の政治』—1990年代以降の中央教育審議会答申および審議経過の分析を通して—」『子ども社会研究』第22号, pp.99-118.
- 園田菜摘・無藤隆 2001「幼稚園『預かり保育』に関する研究：保育の質と子どもの様子」『乳幼児教育学研究』(10), pp.33-40.
- 相馬直子 2013「子育て支援と家族政策—家族主義的福祉レジームのゆくえ—」庄司洋子編『親密性の福祉社会学』東京大学出版会, pp.43-67.
- 杉田敦 2015『境界線の政治学—増補版』岩波書店.
- 横山文野 2004「育児支援政策の展開—子育ての社会化に向けて—」杉本貴代栄編『フェミニスト福祉政策原論』ミネルヴァ書房, pp.67-86.

【付記】

本研究は一部、JSPS科研費15J11590の助成を受けたものである。

【謝辞】

インタビュー調査にご協力いただいた先生方にこの場を借りて、深く感謝申し上げます。どうもありがとうございました。